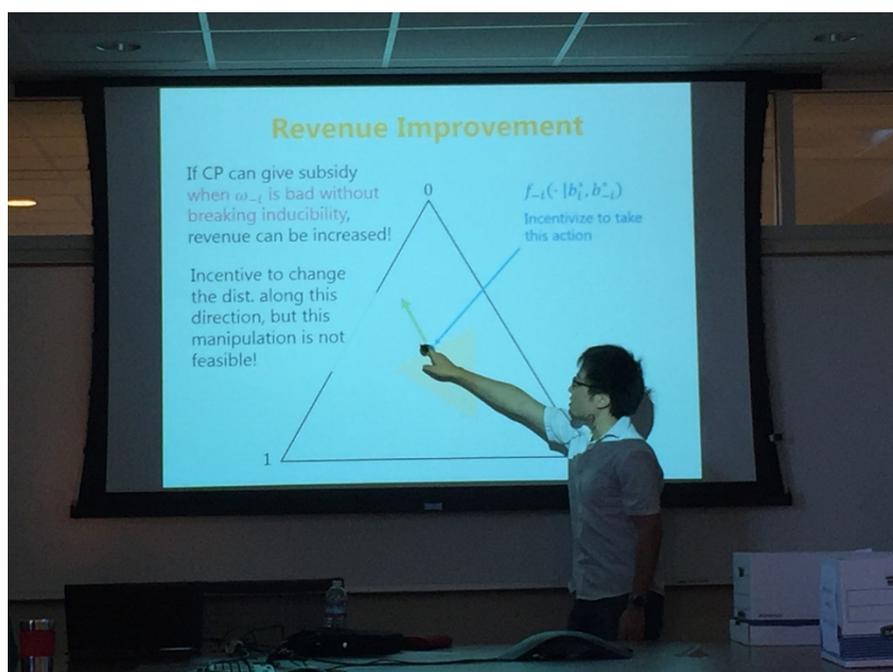


2015年11月

## 第3回 留学生レポート

2014年度 Funai Overseas Scholarship 奨学生  
Stanford University Department of Economics Ph.D. student  
野田 俊也 (Shunya Noda)



スタンフォードでは初めてのセミナー発表。予期していなかった質問に対して上手く答えられない場面もありましたが、練習していった場面は何とか及第点のもらえる出来という印象でした。

2014年秋より、スタンフォード大学の Ph.D.プログラムに留学している野田俊也です。2年目が始まり、研究活動に勤しむ日々を送っています。

### 1. 研究について

前回の留学生レポートの最後に述べていた、夏休み期間での日本でのセミナー発表は、(反省点は色々あるものの) 大まかに言えば成功裏に終えることができました。東京大学の中での研究会や、学会などでの発表の経験はあったのですが、在籍したことのない、他の大学に出張しての研究発表は初めての経験だったので、色々不安な点も多かったのですが、何とか言いたいことは言えて一安心しています。

加えて、学期末が近づきつつあるこの 2015 年秋学期では、スタンフォード大学の Theory Lunch Seminar で、日本で発表したものと同じ論文である “Incentives in Pre-

Mechanism Activities with Externalities”（修士の指導教官である松島斉教授との共著論文）を発表しました。2年生でセミナー発表を行うことは、騒ぐほどのことではないのですが、経済学の分野ではそれなりに珍しく、クラスメート20人の中では2番目でした。

（1年生の間に発表することもできましたが、遅らせたのは英語への不安感が一番の理由です。）

とにかく私は英語が苦手なので、この発表には入念に準備をして望みました。日本で発表した際も、東京大学と京都大学では日本語話者でない学生・教員が出席するので英語でやれ、ということだったので、既に英語バージョンの発表の練習は入念に行っており、本番もこなしていたのですが、やはりアメリカの大学で、ネイティブ級の話者が多数派であるような状況だと勝手が違います。発表の前の週では、クラスメートを1人ずつ晩ご飯やビールで釣って練習台になってもらうということを6回繰り返しましたが、最初の練習では言いたいことの半分も言えずにタイムアップになってしまいました。それでも最後の予行演習では余裕を持ってこなすことができたのですから、人間というのは恐ろしいものです。

発表の前まで、とてつもない不安感に駆られていましたが、終えてみると「まあ次やっても何とかなるな」という感覚になっているので、早めに1度やっておいたのは良い経験だったと思います。まだ来学期のスケジュールは確定していませんが、もう1本の論文も、コメントをもらいたいと思っているので、発表のスロットを申し込もうと思っています。

もう1本の論文とは、修士論文である“Full Surplus Extraction and Costless Information Revelation in Dynamic Environments”（改訂の都合上、タイトルも変更する予定）です。前回の留学生レポートでも少し言及しましたが、この論文は夏休み前にTheoretical Economicsという、理論経済学では最高のジャーナルの1つに投稿し、幸い8月の終わりにR&R (Revise and Resubmit) の返事をいただきました。もちろん、R&Rではまだ喜ぶには早すぎます。が、査読のプロセスが非常に厳しい経済学の分野では、Theoretical Economics級のジャーナルからR&Rをもらうこと自体、なかなか大変なのです。（ジャーナルが公式に発表している[Statistics on paper handling](#)の情報を見ると、2014年の間に一発acceptとなった論文は1本もありませんし、R&Rの割合も相当に低いのがわかると思います）

レフェリー・レポートには色々厳しいことも書いてあり、特に私の英語のexpositionについては、“reading it was frustrating,” “In short, my advice is to rewrite the paper completely,” “the paper reads more like a set of notes hastily written than a polished manuscript,” などというコメントが寄せられていて、反省しきりです。とにかくこのチャンスを落とすたくはないので、しっかり改訂していきます。もし順調であれば、次の留学生レポートあたりで、この論文中で私が証明した内容を少しご説明するかもしれません。

## 2. 授業について

今学期、経済学関係で正式に履修しているのは、Gabriel Carroll の Econ 286 (Game Theory and Applications) と Alvin Roth と Muriel Niederle の Econ 285 (Matching and Market Design) です。その他、Theory Lunch Seminar, Stanford GSB Economics Seminar, Market Design Seminar というセミナーシリーズも、時間の許す限り出席することになっています。

スタンフォードはこういった理論ミクロ経済学の分野では本当に世界最高の大学なので、授業の講師・セミナーの発表者、出席者とも、世界最高の研究者ばかりです。研究の種となるアイデアもいくつも見つけることができました。もともと、大抵の場合は難しすぎたり、既に他の人によって解かれていたりしてボツになってしまうのですが。

正直に言って、1年目のコースワークを履修している間は、あまり自分の興味関心と関係がない授業をいくつも取らされているという印象があって、「授業に時間をとられる」という感覚が強かったのですが、今は間違いなく授業が研究をブーストしていると思います。(おかげで、冬休みの間に集中して取り組みたいアイデアがいくつか生まれてしまい、当分気を緩められる時間は来そうにありません…。)

## 3. 英語について

今学期は、EFS 695 (Pronunciation and Intonation) と呼ばれる授業を履修しています。英語の授業は、去年の秋学期に履修していた Academic Discussion, 春学期に履修していた Oral Presentation の授業に続いて3つ目なのですが、発音の授業を初めて履修し、色々発見があつてとても面白いです。

講師は、私が生まれる前からスタンフォードで大学院生向けの英語の授業を教え続けてきたというベテランで、言語学に関連してミシガンで B.A. を、ハーバードで M.A.T. を取得し、ニューヨーク大学でも教員の経験があるという、物々しいキャリアのおばあちゃんです。授業を履修しているのは私の他は中国人ばかりですが、日本人・中国人の発音のクセを相当正確に理解しているようで、指摘の1つ1つがとても参考になります。

スタンフォード大学はこの発音の授業の履修者に対して、Native Accent という発音を学習するためのソフトを無償で提供してくれるのですが、このソフトはなかなかの優れたもので、最初に学習者のクセを判定するためのテストを行い、どの音・どういうイントネーションに問題があるかを判定して、トレーニングのプログラムを組んでくれます。私の場合は、[z], [a], [s], [ʊ], [ð], [θ], [l], [æ]<sup>1</sup>などを重点的にトレーニングするプログラムが組まれました。その後、マイクに向かって指定されたフレーズを音読している際も、例えば

---

<sup>1</sup> このあたりの記述を見てもわかると思いますが、以前と比べてずいぶん発音記号に注意するようになりました。「聞いたまま発音すればいい」と主張する人もいますが、音に対する感覚に自信がない人は、やはり発音記号と、各発音記号の発声の仕方を体系的に勉強の方が効率的なような気がします。(特に私のような、体系的にモノを勉強するのは得意だけれども、感覚的に何かを身につけるのは苦手な人にとっては)

「この音を[z]で発音しているように聞こえるけど、ここは正しくは[ð]だぞ」という感じで、どの箇所がどのように間違っているかを、それなりに正確に判定してくれます。講師曰く、数年前はイマイチだったらしいので、音声認識の研究に取り組んでくださっている **Computer Scientist** の皆さんに感謝です。

私は留学の準備をしているときにも、**Berlitz**に通うなどして、英語の学習には取り組んでいたのですが、率直に言って、今の英語学習環境を日本に居たまま得ようとしたら、どれぐらいのコストがかかるか想像もつきません。私の外国語学習のセンスの欠如のせいか、なかなか「日本人っぽい英語」の枠を抜けきらないのがもどかしいのですが、ともかく恵まれた環境と努力にモノを言わせ、英語の学習にも成果を挙げたいと思っています。

#### 4. 奨学生との交流

ロンドンの交流会に行けなかったのは残念でした。しかしながら、10月末に今年からの奨学生の永島航洋さんが、カーネギーメロン大学の **MBA** の学生とシリコンバレーを見にくるといっているので、バイエリア周辺の **FOS** の学生がサンフランシスコに集まって、火鍋の会をやりました。

事前に永島さんから、「何か大学内で（テクノロジー関連に関心のある **MBA** 学生にとって）面白いイベントはやっていないか」と聞かれてもまるで心当たりがなく、「サンフランシスコで会をやるとして、どこか良いお店を知らないか」と言われても文字通り一軒も心当たりがない（そもそもサンフランシスコに行くのがこれで4度目程度）という状態で、あらためて、本当に象牙の塔での引きこもりライフを送っているなあ、こんな自分はやっぱりちょっとおかしいのかなあ、と気に病んでいたところ、バークレーに留学中の森亮さんから「それは **Ph.D.** 学生として極めて正常な状態だ」とのお言葉をいただき、とても安心しました。胸を張って引きこもりライフを送りたいと思います。

#### 5. 終わりに

未だに英語に苦手意識と不安感はありますし、研究関連でも現在進行形でトラブルも抱えていますし、趣味＝研究になってしまっているという精神衛生上あまりよろしくない状態も続いています。総論としては私の **Ph.D.** 生活 2 年目は順調な滑り出しを見せていると言えると思います。特に研究に関しては、次の留学生レポートまでに更に良い報告ができるよう、精一杯の努力を続けていきます。

最後になりましたが、私が恵まれた環境で **Ph.D.** 学生生活を送るのを支援してくださっている、公益財団法人船井情報科学振興財団の皆様に、改めて厚く御礼申し上げます。ご期待に応えて研究成果を挙げられるよう、引き続き全力を尽くします。